

## わたしはどういう風に独逸語をやってきたか？ 關口存男

私のドイツ語苦心談がどれだけ参考になるかは疑問ですが、マア一席やってみましょう。

**学歴** まず身の上話から始めますが、私は皆さんのように正規に高等學校や大學を通して來た人間ではなくて、中學二年でよして(姫路中學ですが)それから大阪の地方幼年學校に入學、陸軍士官學校を卒業、見習士官と胸膜炎とに同時になって、少尉に任官したら早速休職を仰せつけられ、その次は型の如く『お前はやめろ』と來た。成績はそう悪い方ではなかったつもりですが、一べん胸膜炎なんてものをやってしまうと、陸軍大學はどうせ体格でペケにきまっている、陸軍大學が駄目なら軍人をやったって仕様がな……こう思って、二十一歳で方向轉換をしたのです。

ええと、一寸申しおくれましたが、私の年齢は今年五十……八だったかな？九だったかな？(どうも自分の年という奴は困るです、今年こそは断然覚えてやろうと思って年頭に断然覚える事もあるんですが、翌年になるとモウ違って來るので、しよっちゅう頭の中で混亂して今日に及んでいます。五十八というのも、ひよっとすると二三年前に覚えたやつかも知れませんが)。

ドイツ語は、實はその幼年學校で學んだのです。幼年學校の事なんぞ知ってる人は大してなかろうが、幼年學校では英語という奴は教えなかった。それは、士官學校へ行けばどうせ普通の中學で英語をやった連中がはいって來るから、少数の幼年學校出身者にだけは英語以外をやらせておくというわけなんでしょう、とにかく地方幼年學校では、ドイツ語班とフランス語班との二組になっていました(東京の中央幼年學校では、その他になおロシア語班というのがありました)。競技などやる時には、いつも此の獨佛兩班が對抗するのですが、どういわけか知らんが、どの幼年學校の話聞いても、優勝するのは必ず獨逸班ときまっていたようです。こういう事を言うと佛蘭西班牙の人達はむきになって怒るが、事實だから仕方がない。また、妙な事には、ドイツ班へ這入って來る男とフランス班へ這入って來る男とは、顔の感じがちがうんですな。士官學校で各幼年學校の者が集って來たのち、私は大阪から來た者以外に關しては何も知らず、誰が佛班で誰が獨班かということは、別に徽章をつけているわけでもないから、本當はわからない筈なのに、顔の感じだけで言いあてたことを記憶します。ちよいちよ間違うこともないではなかったが、それでも十人について七八人まではピタリとあたりました。どういうんでしょうかな？ドイツ語班へはいつて來て **der, des, dem, den**

とか *gegangen* とか何とかやっているうちに顔が段々 *gegangen* 式になって来るのか、それとも、ゲーテのいわゆる親和力といったような以心傳心的な相互吸引作用があって、「おれはドイツ語をやろう」、「おれはフランス語にしよう」と決定する瞬間に、ある種の顔(従って性格)の持主はどうしてもドイツ語乃至フランス語の方へ微妙に吸引されてしまうのでしょうか?……これだけはいまだに不思議におもっています。

小生の顔はここに御紹介申しあげた通りですから(巻頭の写真を御覧下さい……編者)、ドイツ顔というのはどんな顔かということは、これによってお察しをねがいます。若い時は顔中一杯無精ひげを生やしていましたが、終戦後にご時勢がニヤケて来たので、おれもニヤケなくちや不可んかなと思って、殆んど毎日ひげを剃ることにしましたが、時間がかかつて弱ります。

どうしてドイツ語をえらんだか?これはどうも、全然無意識にやったことで、理由なんぞ覚えていません。察するところ、英語が第一でその次が獨逸語、などという、極く世間並な評価に従って、第一がないから第二にしたといったような、ごく無定見な考えだったのではないかと思います。それと、当時ドイツの陸軍は非常に有名だったからでしょう。なにしろ十四歳の小僧のことだから、無理もない話です。

十四歳で気がついたが、なるほど、此の点私は非常に条件がよかったんですな。普通の人みんな高等學校や大學へ行ってからドイツ語をはじめするのに、私はそれよりも数年前にはじめたのだから、これは何といっても一步の長です。殊に十四五歳當時の数年という奴は、事語學に關する限り、非常に影響する所が大きい。語學と音樂だけは、とにかく早くはじめた者が得です。鬼のように途中で晝寝さえしなければです。(私は二三度晝寝をしたことがあります、殊に二十三四歳頃、一時新劇に凝って、一二年の間ドイツ語のドの字も開けて見たことのない時期がありました、まさかドイツ語で飯を食うことになるとは思わなかったので……今の青山杉作君などといっしよに新劇の革新陣営をゴロゴロしていたのです。いまだって新劇はやりますよ、本當!嘘と思うならやって見せましょうか?その代り下手だぞ……)。

#### 最初の苦心

さて十四の時からはじめて、大阪地方幼年學校でどういう風にドイツ語をやったかという話に移りますが、こいつがなかなか厄介です。しかも、此の最初の苦心をよくお話するということが一番大切ではないかと思えます。というのは、これは現に當時わたしと一緒に同幼年學校にいた連中が、(最高は中將、多くは少將または大佐程度で終戦になったと思えますが)まだおそらく三百人や四百人は生き残っているだろうから、わ

たしも嘘は言えず、また嫌遜して嘘を言う必要もないから、自信を以て断言しますが、とにかく地方幼年学校の三ヶ年在學中に、断然ドイツ語が出来だしたことは事実なんで、しかもそれが或る種の異状な努力と熱中の賜であったことは、當事の學友がすべて認めてくれるだけではない、むしろ所謂「ひとつばなし」になって今でも残っているはずで、とにかく驚異の的だったのです。自分からこんな事を言うのはおかしいが、嘘は大嫌いだから、笑われても構わないハッキリ威張っておきます、とにかく驚嘆されたものです。しかも……ここが面白いのですが……自分ながら奇蹟としか思えないのです。

努力と奇蹟、奇蹟と努力！これですな結局。若い時にやるのが何か物になるとすれば、わたしは此処じやないかと思う。努力と奇蹟、奇蹟と努力！……努力が奇蹟を生む。そして奇蹟が努力を生むのです。（前者は普通の修身講話になってしまうが、後者に注目していただきたい。自分でどう考えてみても、そんな努力ができた筈はないと思うのですが、何かの奇蹟で、とにかくやったものらしい。）

#### 十四歳のときに決心

どんな努力をしたかという、一言にして言えば、つまり無謀きわまる事を企らんだのです。すなわち、ABCを教わり、発音の概略を会得し、やがて出るとか出んとか出すとかいう例の夫婦喧嘩みたいところが終って、とにかく自分で辞書が引けるようになった頃だったと思います（何時頃だったかはハッキリ記憶しません、あるいは一年生の始めの頃、あるいは半ばだったかも知れません）、語學以外は別に何一つむつかしい事もなし、ただドイツ語だけが全然新たな學科だったものですから、『よし、おれはこいつを物にしてやる！』と或る日決心したわけなんです。この決心には何のわけもない、いわゆる断言命令的・盲目的・無茶苦茶的・駄々ッ兒の意地張りの・天降りの・その他いろんな決心だったので、しかも此の決心をすると同時に、何だかドエライ者になったような気がして、同輩の顔を見渡しても、なんだか自分より二三級位下の連中みたいな気がしたことをおぼえています。幼年學校では上級生が下級生をなぐりに来るのは毎日の行事でしたが、最初は、何の理由もないのにボカボカなぐられると、くやしくて、夜消灯ラツパが鳴って床の中で一人きりになると、シクシク泣いたこともありましたが、此の『よし、おれはドイツ語をやって見せる、おまえたちなんかどうだって好いんだ！』という挑戦的決心をしてひねくれてしまってからというもの、いくら殴られても口惜しくも何ともなくなりました。その代り、入學の当初は、しきりに父母がこいしくて、姫路ということを知りただけでも、脱走して歸りたいほどセンチになったものですが、いったん此の決心をすると

同時に、なんだか心が両親を離れたというのか、孝心が薄らいだというのか、だいいち親許へ手紙を書かなくなり、衣眠る前にすら故郷のことを考えなくなってしまいました。当時上領という大尉の人が私たち二期生の生徒監で、この人の人格は思いうかべただけでもなつかしくて涙が出るようですが、此の人も私にこういう轉期のあったことは恐らく御存じあるまいと思います。しかし、ある時此の人に呼びつけられて、深夜十二時頃まで、おまえは近頃少しどうかしている、なにか悩みがあったら今全部言ってしまうとあって、やさしく諄々ときとされたことがあります。私は、しまいには泣き出してしまったが、そんな決心をしたことだけは遂にいわなかった。最も崇拜する人であったにもかかわらず、どうしても言えなかったのです。言えば理由を問われる。ところが、理由というのは、前述の通り、なにもないので、ただ駄々兒の意地張りで、しかも此の決心に居直って世の中を見ると、どいつもこいつも自分より以下に見えるという、とにかく理窟では言えない自己救済的決心だったので、そいつを、自分の最も崇拜する上領大尉に詳しくジロジロ見たり批評されたりするということが堪えられなかったのです。……けれども同大尉にはまことにすまなかったので、二三時間一人きりで部屋の隅に立たされた後、一切の返事に代えて私は泣き出してしまいました。大尉は、口だけはきびしく「軍人が泣いたりしちゃいかん！」と言いましたが、顔は實にやさしい顔をして、小さな聲で、「よし、もう好いから、かえって寝ろ」と言いました。私は外へ出てから、思い切って言ってしまうかと考えましたが、しかし、そうすると、「同じ決心をするなら、ドイツ語なんて變なものに決心しないで、立派な軍人になる決心したらどうだ」と言われそうな気がしたので、そう言われると、軍人よりドイツ語の方がいいという理由はどうしても考えつかないもので、悪いな、とは思ったが、そのまま寝てしまいました。(その後同大尉から私の父にあてて、關口は最近少し性質が變って、陰險になる徴候があるから注意されたいという手紙が来たそうです。それまでは淡泊な兒だったと見えます。)

十四五歳の少年でも、性格がすっかり變るほどの決心をすることがある、ということがこれでもわかりましょう。だから、少年の性質が變ったり、淡泊でなくなったりしても、それをすぐ何か悪い事のように思うと間ちがいます。少年には、多情多感な、すこぶる危険な時代があるのです。私ののは、生れてはじめて両親の膝下をはなれ、しかも厳しい幼年學校へはいり、上級生には毎日ボカボカ殴られ、箸の上げおろしにまで一々文句を言われたので、入學當初の數ヶ月は、まるで世界が變ったようで、しかもまだ親しくつき合って打ちとけ合う友人といっちは一人もなし、

そのままで行ったら、あるいは飛んでもない不良になるか、あるいは親許へ逃げてかえって世間の物笑いになっていたかも知れないのです。此の多情多感の危機を自ら救おうとして噛りついたのが偶然ドイツ語だったわけです。たとえば、お灸をすえるとき、感じのにぶい人は平気で我慢できるでしょうが、感じの鋭い人は、何か、下っ腹に力を入れるとか、誰かの腕をギュッと握るとか、とにかく何かにしかりつかまって渾身の力を拳に集中しないと、熱さに對抗できないでしょう。それと同じことです。私も、まるで横っ腹の一番くすぐったいところにお灸をすえられるような多情多感な少年時代の危機に對抗するために、何かに噛りつこうとしたのです。するとドイツ語が一番手近かにあったきりの話です。若い人たちは此の話はわかってくれるでしょうか？

#### 最初何にくらいついたか？

ドイツ語を物にしてやろうと決心した前後の事情はだいたいこれくらいにしておいて、さてそのつぎには、その実行の模様を出来るだけ思い出して書いて見ます。これは大いにご参考になるだろうと思います。ただし、その実行方法が誰に話しても恥ずかしくない模範的なものだったから参考になるというのではなくて、模範的でないから参考になると思うのです。あんまり頭の悪い人に読まれるとチョット困るのだが、どうせこんなくだらん記事を読む人にはそう頭の悪い人もおるまいから、思い切って正直に書きます。模範的でない人には模範的でない事の方が模範になるでしょう。

とにかくですな…… とにかく決心すると同時に日曜日に(大阪の幼年學校に居たのですから)心齋橋通の丸善支店へ出かけて澤山ならんでいる洋書の前に立ったわけです。『とにかく本を買おう！』という氣持でいっぱいでした。ところが悲しいことには何を買っていいかわかりません。うっかり醫學書なんか買ってはつまらん…… (堂々たる本はどうもみんな醫學書らしいのです) と思って、あっちこっち見廻っているうちに、財布との関係もあるので、とうとう例の Reclam 叢書ばかりつまっている書棚の前に立って眺めはじめました。星一つが五錢だったと記憶しますが、あるいはもう十錢にもなっていたかも知れません。とにかく星一つがいくらと書いて貼ってあったから、安心して標題をながめはじめました。ただ、店員が見ているので、辭書を出して引くことができないのは弱りました。

とどのつまり買ったのは、非常にぶ厚い、星が七つも八つもついている、ドストエフスキイの『罪と罰』の独訳 (Schuld und Sühne) です。私にとっては實になつかしい本です。なんと思っこんな本を買ったかという、ちよっと中をあけて見ると、一頁の中に ist とか in とか ich とかい

う、わたしのすでに充分知っている単語が、たてつづけに五つ六つならんでいところが眼についたからです。それと、とにかくウントぶの厚い本を買ってそれをみんな読んでしまうんだ！という、少年らしい、實に誇大な感情があったからです。星の一ばん多い本が偶然此の **Schuld und Sühne** だったのです。

この点は、わがことながら非常に面白い。何の定見もなく、ただモウ尫大だったから買ったという事実……此の事実が凡てを語っているように思われます。いったい若い者のやらかす無意味なことほど意味深いものはありません。若い者が何かおかしなことをしたら、教育家はその点を最も尊重すべきだということがわかります。

さて、それをどういう風にしたかということ、それが實に思い切った無茶苦茶な讚み方なんです。學校ではまだやっと、ご存じの方があるかも知れませんが、昔方々で使っていた **German Book** という **Hier ist ein Mann.** ではじまっている読本の最初の半分ぐらいしかやっていない時に、しかも世の中の事を大して知らない十四歳の少年が、突然ドイツ語の小説をよみ出したのですから、どんな風によんだか大体察しがつくでしょう。というよりはむしろ「どんな風によめたか」ということが今でも私自身には疑問です。とにかく、最初の一行からして全然意味がわからなかったのじゃないかと思えます。單に、ところどころに **ist** とか **nicht** とか **Haus** とか **schön** とかいう、わかる単語がないこともないので、そんなのが出て来ると大体その辺の意味がボンヤリわかったような「氣」がしたのじゃないかと思えます。頭の好い少年なら、「こりやあ全然わからん！むつかしい本に嚙りついては時間の無駄だ！」というハッキリした認識が起るでしょうから、好い加減に見切りをつけて、よしたかも知れませんが、ところが私はそういう実際的なことにかけては實に頭がわるかった。それに、大人に相談したり、先生に智慧を借りたりすることが大きらいだった。（初めての家に訪れるときなど、人に道をきくのなども、軽くきけ出したのは四十歳近くになってからだと思います。今でも問題によると、どうも人の智慧を借りるのがきらいです。どんなに損をしたって、損の方はいっこう痛く思わない、ただとにかく自分の思ったように下手なことをしないと生きていような氣がしないという困った癖があります。つまり「頑固な病人」というタイプですな。學問上の事も然り。學界で八十年も前に発見してしまっていることを最近自分で発見して感心しているようなことが澤山あります。人の忠告は、うがった忠告であればあるほどきらいです……）ドイツ語の先生とは毎日顔を合せているのだから、相談すればきつと好い本をおしえてくれたでしょうに。

ちっとも分らないままで五頁や六頁は読む人もあるかも知れませんが、私のように百頁も二百頁も(しかも丹念に)読んだという人はあんまりいないでしょう。私はそれをやったのです！頭のいい人ならイヤになるところだが、わたしはっこうイヤにならなかったのです。……意味がわからないままで読むといっても、決して上すべりして字の上を滑走したというわけではありません。とにかく「わかろう、わかろう」と思って、片っぱしから辞書を引いて、辞書に書いてあった意味を何でもかでもその語の妙な響きに結びつけて、そうして一行か二行を穴の開くほど睨みつけて、十ぺんも二十ぺんも三十ぺんも読みなおして、そして、ああじゃないか、こうじゃないかと、とにかく十四歳の少年の智慧に及ぶ最後の限界まで考えつめたのです。

とにかく……どうも「とにかく」が多過ぎるが……とにかく人に言わせないで自分で最後まで考えることは子供の時から好きでした。女学校へ行っている姉がよく色んな謎をおぼえて来て私に課しましたが、姉の一寸癖がわるくて、人に謎をかけておきながら、人が考えている最中に、からかいながら、答を露骨に暗示するような事をはたから言うので、よく怒って喧嘩したことをおぼえています。おしまいには、姉が謎を言うと、私は直ぐ裏へ行っ、裏戸をあけて、耳に固く指をつっこんで考えたものです。

つまりそれとおんなじ気持ちで、わからぬ本を一年半か二年ばかり眺めていたのです。途中、同縣人の下宿で、誰だったか此の罪と罰との翻訳が出るとか何とか言ったのを偶然きいたことがありましたが、その時の不愉快な気持は今でも一寸おぼえています。もちろん、そんな反訳などを参考にする気持はありませんが、とにかく、自分がこうして大事にして探っている一步一步の秘密が、翻訳家だか何だか知らないが、抑々世の中の誰かに、ちゃんと日本語に直せるほどハッキリわかってしまっているのだ……という感じは甚だ不愉快なものでした。そういう偉い人に会ったとしたら、私はとても同席していることはできなかつたにちがいません。

それから、とにかく、わけもわからなくせに、その本がとにかく非常に好きになりました。バラバラに破れてしまつてからも、新たな表紙をつける氣になりませんでした。とにかくその茶褐色の表紙が自分の命の一部になつてしまつたので、それが白になつたり緑になつたりすることは考えられなかつたのです。(これを以て見ると、わたしのドイツ語勉強の発心は、精神的、内容的なものではなくて、全然外形的、動物的なものだららしい。何が書いてあるかわからない本を、單に表紙の色に對する愛着から、一年半も二年も、毎日毎日とり出して、こんなに好

きな表紙の本だから何とかして解りたいと思って一心不乱ににらめっくらしたのですからね……こういう無茶苦茶な馬鹿な気持は、人にわかるかどうか、それがちよつと私にはわからないが……しかしこんなことは誰にもあるのじやないでしょうか？人間というものは、口ではみな相当立派な筋路立ったことを言うけれども、やっている事はみんな大体比の程度の変なことばかりなのじやないでしょうか？)

要するに、ちよつと千頁近くもある本を、わけもわからぬままに、二年ばかりかかって、数百頁よみました。するとどうでしょう、おしまい頃には、なんだか……わかり出したのです！「わかり出した」というと嘘になるかも知れません。「なんだか」わかり出したような気がしたのです。此の「なんだか」も實をいうと只今のわたしにはよく思い出せない。しかし、とにかく、こう言うことはできます、すなわち、第一には、小説の中の筋がわかり出したのです、主人公のラスコルニコフはどうも此の女が好きになったのじやないかという気がしはじめると、はたしてその通りになったりなどするのです。そんなことをしたって無駄じやないかと思って読んでみると、はたして作者が「しかしそれは無駄であった」と言ったりするのです。これは正に私に話の筋がわかり出した證據です。

ところが妙なことには、話の筋は大体わかってきたのに、文章の関係や、その他文字のことはホトンド霧の日に隣の家を見るように、朦朧と霞んで、なに一つハッキリわからない。たとえば、ズラット一行の文章がならんでいると、わたしはいつもの癖で、すぐそれを発音してペラペラと読んで、幾度もくりかえして、おしまい頃には、二行か三行までの文章なら、二三度よむと、すぐ眼をつぶってそれを暗記で言えたものです。ところが、その中には、ほんの飛び石のように、あちこちに知った単語があり、ちよいちよ知った句があるくらいのもので、全体の構造などはわかりもせず、翻訳して見ろと言われたって出来ません……が、それにも拘らず話の筋はよくわかって来たのです！

文章の意味がわからずに話の筋がわかるというのは、実におかしな話ですが、実際そうだったんだから、決して嘘ではありません。とにかく、わけのわからぬ本を、毎日毎日にらんで、それを二年ばかりつづけたあとの状態というものはそういうものだと見えます。

そうだ、書いているうちに重要な事実を思い出しました。当時の私は、別にドイツ人の発音をきいたわけではなかったが、いつも「若林」という先生の口調が頭にあつたので、たとえば床に入って眠りこむ時には、意味のわからないドイツ語の長い長い文章が(二行三行ぐらいの)しきりに頭の中できこえるのです。まるで蓄音器をかけるように！……こんな

ことがありました。ある夜床の中で、例によって、まるで近所のうるさいラウドスピーカーのように耳朶を搏つ、そうしたドイツ語の句や文章になやまされながら、何かたわいもない事を考えながら眠り込もうとしていると、どうも一つだけどうしても鳴りをしずめない変な文章があるのです。もうウルサイ、はやく寝よう、とおもって右に寝がえり打ったり左に向いたりしますが、またしてもまたしても同じ文章を頭の中できりかえして、自分ながら手がつけられません。おしまいには、つづけるところまでつづけてやれとおもって、頭を冴えさせて、その次を次をと頭の中で綴って見ると、おどろくなかれ、ほとんどレクラム版の一頁近くもあろうかと思うほどの文章ができあがる、しかも、フト、それがどの頁にあったかも思い出したので、そっと床を出て、本を出して、便所へ行って、暗い電球に本を近づけて、その場所を探したのです。すると、すぐ見つかりました。しかも、読んでみると、一字二字の差はあったが、ほとんど私が知らずに暗記していたままでした。しかもそれが、ほとんど一頁近い長さなのです(もっとも中の筋がおぼえそうなところでした)。

これは、私が、わからないままにも、同じ箇所を何度も何度も口に唱えながら、おそらくは一晩の中に一頁ほどの所を何十度とくりかえして読んだ日がその二三日前にあったことを証します。暗記しようと思って暗記したのではなくて、とにかく小野道風の蛙のように、飛びついてはおっち、飛びついてはおっち、ほとんど狂じみた単調な努力を、子供の一心で、一年半あるいは二年ばかりくりかえしているうちに、あの大きな本の中のあらゆる半わかり、或いは三分の一わりの文句を、ゴツチャにはあるが、とにかく潜在意識の中に不知不識の間に叩きこんでしまったわけです。

最初おぼえたドイツ語はどんな風に  
頭の中へつめこまれたか？

そういう調子だったものですから、私の頭の中には、なんだかよく意味のわからない、あるいは半わりのドイツ語の単文や断句がゴシャゴシャと詰めこまれてしまったわけです。意味がよくわからなくても、いっこう苦にならない。というよりは、むしろ、いろんな文句がペラペラッと出てくるのだから、それですつまり解っているような気がしていたものと見えます。たとえば **elf** (11 のこと、英の **eleven**) という語におめにかかるたびに、何の理由もなく **Es schlug gerade elf** (ちようど十一時を打った) という文句が頭の中に反響します。ところが **gerade** の意味はよくわかっていないのです。そんなのは、そういってもまだよくまとまった短文ですが、大抵はまとまらない意味のものが多い。たとえば、よくお

ぼえている例で言うと、整列して訓示を聞いている最中に、何か「息子」ということばが耳にきこえたのです。すると、息子というドイツ語は **Sohn** だということはよく知っていたのですが、**Sohn** !と考えると同時に、どういわけだか **die die liebe Base meinem Sohne hat angedeihen lassen** という相當の長句が蓄音器をかけたようにペラペラと思い飛びました。整列している最中のことですから、暇なので、**die die** っていったい何だろうかと思ったり、**angedeihen** というのは、動詞にはちがいないが、どうすることなんだろうと思ったりしましたが、殊に **Base**[バーゼ]という単語が、ひびきが何となく怪奇な感じをおこさせるので、訓示がすんだら直ぐ辞書を引いてやろうと思っていると、訓示がひどく長くなって、解散すると同時にすぐ体操服にきかえてまた整列となり、それから三四時間ばかり次へ次へ何かあって、ついに夕食後にやっと辞書を引きました。すると **Base** というのが二つあって、一つは「塩基」、一つは「親戚の女」とか何とかいうのですが、どちらだかわからない。その後十年ばかりは、とにかく「塩基」(というのがそもそも何だかわかりませんでした)とか「親戚の女」とかいうとすぐに此の **die die liebe Base meinem Sohne hat angedeihen lassen** という句を考える。十年後に、ちっと氣にかかって、**angedeihen** というのを辞書でしらべてみたが、それでもまだ何のことやら要領を得ず、ついに三十歳近くになって、法政大學でドイツ語の先生をいただいた時、下しらべをしていると、また此の **angedeihen** が出てきて、しかもやはり **angedeihen lassen** という結合ででてきた。けれどもその時には辞書も何も引かずに、このむつかしい語がぴたっとわかり、しかも意識的に自分のものになったことをおぼえています。以上はほんの一例ですが、わたしの頭の中につままっているドイツ語というやつには、多少の差こそあれ、すべてこれに似た妙な曰く因縁がある。しかも、単語としておぼえているものよりは、むしろ文章や句でおぼえているものの方が多い、つまり、わたしの頭というガラクタ箱にいっぱいつままっているのは、小石ではなくて、縄の切れっぱしなのです。ちよっと見えている端っこを引っばると、ぞろぞろと長い縄が出てくる。しかもその縄があっちこっちもつれていて、一本だけ引っばり出すわけにゆかない。一本引っばれば、それにもつれて何の関係もない別な縄が二本も三本も出てくる……

だから(これはマア十五六年も二十年も後の話になりますが)法政大學の豫科や獨文科で、最初元氣の好い頃の私に教わった人たちはおそらく記憶があるでしょうが、わたしは何かというとすぐにチョークをとって黒板にペラペラと長い文例を書きました。老熟して来ると、ごく簡潔な、キチンと意味のまとまった、ほんの三四語か五六語でまとまった文例を

書いたが、未熟な若い当時は、とにかく思い泛かんだままのゾロゾロした長い縄をそのままならべて見せたものです。講義をきかされる学生たちこそいい迷惑です。けれども、そのために「あの先生はものすごい」という評判になって、たちまちのうちにドイツ語の天才だということになってしまった。学生にとってはドイツ語の天災だったわけです。

文例による獨乙語文法を思い立って  
文例整理ノートを設定したこと。

けれども、こうしたわたしのペラペラのメトードは、それから十年二十年後には、おどろくべき威力を発揮したことは事実です。三十歳になる前頃、演劇の方では到底めしが食えないことがわかり、ついにドイツ語でめしを食うことに決心した或る日、わたしは此の「句と文章」を中心とした行き方の一大ドイツ語論を書くことを思い立ち、それからのちは、わたしがその時まで無意識に機械的にやっていた勉強法を、いよいよ合理化してノートにとることにしました。只今わたしの座右にある行李に一ぱいほどの分量の、百冊近くもあるノートがそれです。どんなノートだか、それは商売上の秘密でちょっと言われませんが、大抵の人はチョット開けてみただけでもウワーと言ってびっくりしてしまう。(此のノートは終戦の直前、長野縣の妻籠へ疎開する際、まるで探偵小説みたいな隠れん坊をして私を心配させました。私たちは、荷物をすっかり造って、宇田川という近所の運送屋さんに萬事をたのんで、身体だけ四月前に妻籠へ行ったのです。ところが、何時まで待っても荷が來ない。どうしたんだろうと思っていると、そのうちに到頭留守宅にいた畏男の存哉から「イエヤケタ、ミヒトツカイシヤヘユク」という電報がきた。いったい此の存哉という奴は氣が利かない点で有名なんです、荷が出たら出たと付け加えれば安心するのに、荷のことはなんにも言わずに、單に家焼けたと言ってきたから、こっちは勿論荷が出ないうちに家といっしょに焼けたものと思って、すっかり覚悟してしまった。殆んど半生もかかって書きためたノートが焼けてしまったのですから、これはモウ學者としての資格はゼロになった、半生かかって計画して來たドイツ語の「句と文とから行く文法」もモウ灰になってしまった、と思いました。ところが、それから十日か二十日ばかりたつと、ヒョッコリと一荷車分の荷物がついたので！しかも、あとで聞くと、荷が家を出たのは四月十二日、即ち家が焼けた前の日だというじゃありませんか。一日の差で、いや、詳しく言うと十時間ぐらいの差で荷が助かったわけです。……ところが話はまだそれだけではないので、ノートの運命はもっと際どいことになっていたので。ノートは、三箇の木箱にはいつていたのですが、荷をほどこきながら調べて見ると、その木箱がどうしても二箇だけしか來てい

ないことを発見しました。なまじっか喜んだ後のことなので、これにはガッカリしました。わたしに取って見れば、衣類や勝手道具がいくら澤山助かったって一向ありがたくはない、肝腎かなめのノートが、三分の二になってしまったのでは、だいいち用をなさない。全然來ないのと大差ないわけです。私はまたガッカリしました。……ところが、それから一月ばかりたつと、また追加の荷がついて、ソレというので駆けつけて見ると、來た來た、すっかりあきらめて居た一つの木箱が、何食わぬ顔をして入口になげ出されてころがっている！……運送屋さんから來た手紙によると、十二日に目白駅へ荷を運んだところが、荷が荷車に積みきれなくて、五六箇残ったのだそうです。ところが、神佑と言いますか、その荷物の残りを、もし私の家へ運び戻していたら、家と一緒に焼けていたのですが、運送さんが、警報が鳴ったものだから、荷を自分の店の前に投げ出したまま警防團の詰所か何かへ出かけてしまい、そのために助かったのです。なるほど、こんど東京へかえって來て見ると、運送屋さんの家の一角だけが焼けずに島のように残っている！

つまらんおしやべりに頁を空費しましたが、とにかくそうした劇的運命を閲して、そのノートはまだ無事に私の座右にあります。それは実に混沌たる鬱蒼たる、ジャングルのごときノートです。三十年近くの間、毎日毎日、丹念に書きためた、但し私以外の人には恐らく利用のできない一種異様なノートです。たとえば前置詞 in だけのために、相当の厚さの一冊があって、それが數多の項目にわかれていて、どこを見てもタイプの細かい字が一杯打ちこんであって、それに、赤や青や黒や緑の、いろんな印がついたり、注意書きが書きこまれたりしている。だいいち、開けるのにも、相当用心して開けないと、風の吹く時に開けようものなら、整理に十日や二十日はかかるでしょう。つまり、ノートというやは、わたし自身の頭よりはずっと微妙に細かく出来ているので、ノートによって頭の整理をすることはできますが(またその為めのノートでもあるわけですが)、頭でノートを整理するなんてことは到底できません。火事も困るが、風も相当おそろしいのです。

### 流 読

また脱線しましたが、これでいよいよ私の初歩時代の話打ち切るために、「ハハア、おれにはドイツ語が贖める」という最初の自信を得た瞬間のことを述べておきましょう。これはハッキリと覚えています。学校で教えられるドイツ語を全然度外視し、初級中級をカッ飛ばしていきなり千頁近くもある原書にくらいつき、まるで猛獣に巻きついて食うか食われるかの死闘を演ずる熱帯の大蛇のごとき鼻息で、執拗な、単調な努力を、およそ一年半ないし二年もつづけたでしょうか。(生活環境

に対して非常に敏感で、軍人の學校へ這入ったことを忽ち後悔した私は、此の無謀無策にして単調且つ執拗なる内面的死闘によって当面の焦慮から救われたのでした)あの尙大な書物の三分の二ばかり、わからぬままによんだのち、二年生から三年生になる當時だったと思いますが、なんだかコウ、ところどころ、イヤにはっきりよくわかる箇所が頻々として出てくるのに気がつきはじめました。時とすると、半頁も一頁も、スラスラと讀めて、よく意味がわかるのです！

此の時の妙なうれしい氣持は非常にハッキリ記憶しています。おかしい話だが、語學というものは意味がわかって讀まなければいけないものだというのに、生れてはじめて気がついたのです。というよりはむしろ、まるでコロンブスが亞米利加を發見したように、「横文字で書いたものにも、やはり一語一句ハッキリした意味があるのだ」ということを發見して、まるで一大發見をしたような氣待がしたのです。

### 最初の自信

そして……これもハッキリ記憶していますが……「そうか！では此の本の中に書いてあることには、いま解ったような意味の、ハッキリした一言一句の意味があるんだな……」と思いながら、その茶褐色のレクラム本を手にとって、つくづくと眺めると、なんだか、その本がそれまでとは全然ちがった本のような感じがしました。それまではただ妙に好きだったにすぎませんが、その瞬間からは或種の畏敬の念を以て眺めはじめたのです。

そして、「今までの所は、そんなに一言一句に大したハッキリした意味があると思わずによんできたが、では、初めっからそういう風にハッキリ意味があったのかしら……」とおもいながら、試みにチョット一番最初の頁をあけて、はじめの数行を讀んでみたのです。するとどうでしょう！わかるのわからないの、一度スラリと読みおろしたきりでピタリとわかるではありませんか！わたしは、まるで狂人のようになって夢中になって最初の十頁か二十頁ばかりを一氣呵成によみ流しました。わかるわかる！おもしろいようにわかる！あっちにもこっちにも、既に充分暗記して頭にこびれついている句があつて、しかも、忘れたものも忘れないものも、みな一様にハッキリとわかります！まるで近眼に気がつかずにいた人が、急によく度の合った眼鏡をかけたようです！

それからのち一ヶ月か二ヶ月ほどかかって、それまでの二年間に死闘しながら取っ組んできたその本を、また読みなおしました。この時のドイツ語の進歩といったら、物すごいものでした。また、この時に得た自信は大したものでした。そうして、三年生になってからは、サアこんどは買った買った、レクラム版の小説や戯曲をウンと買って、一年間に相當

よみましたが、中にはちよいちよいむつかしくて筋も何もわからぬものもあったが、大部分は、ちよいちよい辞書を引くきりで、マア大体中に書いてあることはスラスラとわかった。一文のうちに二語や三語知らぬ単語が出てきても、大体わかると、そのまま次をよんで行くという「流読」の癖がついたのも、この、地方幼年學校三年のときです。教室で読む教科書なんてものはモウ馬鹿々々しくて仕様がなく、全然先生のいうことをきかないで、退屈しのぎに辞書の随意の一頁をあけて新知識を漁っていたことを記憶します。

前回までにおいて、わたしの甚だ我武者羅な、最初の二三年の勉強法を述べおわりましたから、今度は、それに就て、その後わたしがツクツクと考えたことを一括してお話して見ようとおもいます。

まず、語學の勉強法を云々するときによく問題になる「精読か濫読か」という見地から、私が只今のべたような無茶苦茶な勉強法を回顧してみましょう。精読か濫読か、という見地から、考えてみると、私のは、どっちに屬するのだからちよつとわかりません。亂暴な粗雑な読み方だったという点では濫読のようでもあるし、一向はかどらなくて、片っぱしから辞書を引きながら、一日に大して進まなかったという点では精読のようでもあります。

ところが、例の尅大な小説をよみ了って、多少の自信ができて、それから次に色々なムツカシイ書物を次から次へとよんで行った「第二期」においては、私は完全に「濫読」の方の行き方を採用しました。手あたり次第に読み、半消化のままに通過し、迅速に片づけ、次から次へと漁った……要するに典型的な濫読です。

#### 精読と流読

そこで、これは恐らくどなたも関心のおありになることだと思いますから、此の精読か濫読かという有名な問題について、私自身の癖と関係した所信を述べておきます。(所信というものは必ず個性と関係しているもので、私がこれから申し上げることも、すべて、私と同じようなタイプの人にのみ通用する眞理だと思って下さい。私は、Nietzsche の用語を借りて言えば、いわゆる dionysisch 型の方に屬するように思われます。)

語學の勉強には、精読的な行き方と、私のような濫読的な行き方とがあつて、その二者には各々向き不向きということもあり、また一長一短があつて、よく議論の對象になるのですが、わたしは、どちらかというところ、濫読の方に味方したくなります。それは、いままでに述べた若い時の経験があるからです。(ただし、若い人を眼中においた場合はなしと申して下さい。相當年を取ったのちとなると、これはまた少し話がちが

ってきます。その事はまたずっと先へ行ってからのべることによしまし  
う。相当年をとって、殊に翻訳でもしようかという人が、そうした濫  
読「のみ」によって生じた語學力で中途半端に好い気になって、わか  
つたようなつもりで仕事をすると飛んだことになるので、これは世間  
に一番多い例で、世を毒する事これより甚だしきはなしと言いたい  
のですが、これからの話は、そんな上層のはなしではなく、単に語  
學の力をつける最初の時期の話なので、勘ちがいをして頂きたい  
と思いません。)

濫読という言葉がわるいから「流読とでも申しませうか。Statarische  
Lektüre (精読、熟読)に對する Kursorische Lektüre (走読、流読、通読)  
です (英語でも cursory reading ということを言います)。こいつが  
出来るようにならないと語學は進歩しません、また、相当はじめ  
の頃から、思いきってこいつをやらないと無意識な底力というもの  
がいつまでたつても生じないのです。スラスラと読み流すなどとい  
うことは、それは相当語學力がついてから後のことだろうと思  
うと大きな間違いで、それはむしろ逆で、それをやらないと「  
相當の語學力」なるものがそもそも生じてこないのです。「わか  
るとスラスラ読めるようになる」のではない「スラスラ読むと  
わかるようになる」のです。

もちろん、最初から此の流読という奴をやるには、すでに物心の  
ついた、頭の冴えた、常識のある人には、相當の覚悟が要ります。  
私は、いきなり軍人の學校へたたき込まれて頭が混乱していたた  
めに、ほとんど正當防衛をするような絶望的な氣持で喰らいついた  
ために、思い切ってそんな非常識なことをすることができたので  
すが、正常な自由な環境の下に勉強してられる青年諸君としては、  
意味もなにもわからずに、ただ時々、一頁に二行半わがりのす  
る所が出てくるのを楽しみに千頁もある尨大な本を読んで見ろと  
言たって、或いは馬鹿々々しくて一週間と読んでいられないか  
も知れませんが、それよりは何かよく章味のわかるものを讀んで  
みたいという欲望が当然起ってくるでしょう。進歩しているの  
やら進歩していないのやら全然見當のつかない無駄なことを一  
二年も一心不乱にやれと言たって……それはチヨット出來ます  
まい。けれども……けれどもです！何等かの意味に於て單調な、  
執拗な、頭のわるい、非常識な、盲めっぽうな「糞勉強」を  
しなければ何だつて物にならないのですから、語學だつてや  
はりその通りで、さてその糞勉強をどういう風に持つてゆくか  
といへば、それは此の一見無茶苦茶なような「わからぬままに  
讀んでゆく流読法」というのが、後になって見ると一番近路で  
はないかと思うのです。ただし既に言つた通り、相當頭の發達  
した人は、此の流読というやつを徹底的にやり遂げんがため  
には、相當覚悟してか

からなければなりません、それはどんな覚悟かということ、まず第一には、少々わからなくても、そんな事はあまり気にしないことです。第二には、わからない単語を一つ一つ辞書で引くのもよろしいが、そのために一向進まなくなるとは流読の意味をなしませんから、一語一語の意味を知ろうとする努力はマア適当にしておいて、わからない所があったらわからないままにしておいて先を読んで行くことです。ただし、ある一つの文章がよく意味がわかって、しかもその中に一語一句だけ知らないものがある、それが非常に気になる……といったような事がよくありますが、そんな時には、チョットゆっくりかまえて、辞書を引いて詳しく考えてみることです。そんな時に調べた単語は非常によく頭に入り、あとで非常に爲になります。これは単調な流読の沙漠の中の緑地のごときもので、そんなことばかりやっているとそれがまた単調になって効果が少なくなります、たまにやるからよく効くのです。

第三には……これが最も重要！……色んなツマラナイ反省を敢然として斥け、完全に馬鹿になりきることです。頭の好い人にはこれがなかなか出来ない。頭の好い人にかぎって成功を焦る、辛抱というものが無い、いろいろともっともな事を考える、いろいろと自分のやっていることを自分で批評する。……これがいけないのです。「こんなに大して意味もわからずにドンドン読んでいるが、これは結局単に上すべりにすぎないのではあるまいか?」とか「自分では一向進歩しているようにも思えないが、これでは何の楽しみもないではないか……」とか、「もっと何か適当な本さえあれば、もっとよく意味もわかり、もっと進歩するのではなからうか?」とか、その他種々さまざまな反省が生ずるでしょうが、それは流読の際には厳禁です。そんなに頭の好いことを考えるなら、ついでにモウ一つ頭をよくして、「方法に良し悪しはない、良い方法を不徹底にやるよりは、悪い方法を徹底してやる方が、結局最後の意味においてはそれが好い方法なのだ」という風に考えるべきです。

要するに、流読は、或いはあまり好い方法ではないかも知れませんが、時間と精力の浪費を意としない元氣旺盛な若い人々は、やろうと思えば最もわけなくやれる方法なんですから、その意味においては或いは好い方法と言っても好いのではないかと思います。

一字一句の意味をしらべ、よくわかってからでないとい先へは進まぬという精読主義の方は、わたしはこの方がむしろ実行しにくいと思います。この方はよっぽど意志鞏固な人でないと最後まで徹底的にはやれないでしょう。それに比べると、同じ糞勉強にしても、流読の方はずっと事が簡単です。阿呆にでもできます。(かしこい人には、今言ったように、ちよつと困難があります)。

精読というやつをやる時には主として「頭」と「理智」と「意識」が働きます。それに反して流読というやつをやる時には「感じ」と「本能」と「無意識」が働くのです。わたしは、語學というやつは、頭の問題ではなくて、やはり感じの方が主じゃないかと思えます。頭でおぼえたことは割合役に立たない、感じと本能でおぼえたことは確かです。だいいち頭では一時にたくさんのは覚えられない、それに反して本能と感じというやつは、ごく漠然とではあるが、短時間のうちに、信ぜられないほど多くの事をおぼえます。暗記なんて問題も、けっきょくは感じです。それが証拠に、たとえば或る一つの単語をとって、それを理屈でおぼえようとしたって、思ったようには行きません。覚えられたか覚えられなかったかということは、けっきょく長い月日のたつたのち判明するわけですが、その時によく調べてみると、「これは必要だから何とかして覚えよう……」などと思って意識的に努力しておぼえた単語なんでものは割合おぼえていなくて、最初から何となく覚えられそうな「感じ」のした単語をやはりいちばん確實におぼえています。これを以てみても、暗記なんでものはすべて感じが主であるということがわかるでしょう。流読しているというのと、意識的に詳しく考えるなどという暇がありません。そのために、頭脳の方が遮断されて、主として潜在意識の方がはたらき出すものと見えます。精読してわかると、意識活動が旺盛であるために、一見非常に進歩しているような気がして、頭のいい人には、氣持に満足を与えます。その代り、冴えた意識活動のために、無意識活動の方が阻止されて、感じというものの発達が、むしろ邪魔される傾向すらあります。

私は、最初の二年間ばかりは、小野道風の蛙のような努力もしましたが、大体から言ってやはり流読をやったわけです。そして、わかり出して、多少スラスラ讀めるようになると、こんどは流読ばかりやりました。つまり十六の年(地方幼年の三年目)から二十六七歳の頃まで、約十年間は、ほんとうの流読あるいは濫読でした。精読なんてことは、ほんのたまにやっただけです。三十近くになって、法政大學で教鞭をとりだして、學生の前で説明をしたり訳をつけたりしなければならなくなった時に、はじめて精読をしなければ教師はつとまらんと氣がついて、それからやっと詳しく考えながら読むように自分で努力する習慣をつけたぐらいのものでした。

地方幼年學校時代、しよっちゅうわけのわからぬ短文や断片が頭の中で躍っていて、それが丁度役に立ったことから思いついて、私はその後、或種の方法を自分で發明して意識的に用いはじめました。それはすでにこれまで何度も人に紹介した方法ですが、ついでに一寸のべておきます。

(実際的には二十歳頃からやり出したフランス語の勉強の時にはもっぱら此の方法で進歩しました。)

### 「暗記」について

それはこうです。流読をやっている最中、「これはよく意味がわかる！」という文に遭遇すると、わたしはすぐ本から目を上げて、その文章を(たとえ二行でも三行でも)ソラで言ってみます。つまったら、カンニングをするようにチヨット本を見て、なんとかしてそれを覚えてしまいます。そしてそれを何度も何度も言っておぼえてしまうのです。

おしまいには、どんな文でも、二行三行くらいまでは、それを一度讀んだきりですぐソラで言えるようになりました(三四年つづけているとです)。しかも、一つの文をいつまでも暗記しているのではなく、どんどん忘れてもいいのですが、とにかく文をよめばすぐそれがソラで言えるように、毎日毎日練習しました。もちろん、あんまり面白いことではないから、半時間と根気がつづきません。たいてい十五分か二十分ぐらいでウンザリしました。しかしそれをとにかく毎日一回や二回は必ずやりました。

そうすると、いろいろと妙なことがおこってきます。たとえば、或る頁のおしまいまできて、まだ文が終らないで次の頁につづいている時などは、すぐ頁を開けないで次の頁の最初の単語が何であるかを、十中八九までは言いあてられるようになります。最初の一語だけではない、時とすると四五語も、自分の想像する通りになって行くことを発見したりなどします。こうなるとモウ非常に進歩しているのです。(しかも変なことには、大して意味のとれない、知らない単語だらけの文章すら、そういう風にして先きを言いあてることができるようになるのです。變ですが、実際そうなるのです。)

私は、ドイツ語をやりながら、そういう風にして、ごく樂にフランス語を物にしました。しかも、とても短時日に物にしました。神田のアテネ・フランセという學校へ通ったのですが、すでにその前の一年間にそれをやり、なおつづけて二三年やると、忽ちにしてフランス語が一通りよめるようになり、また喋舌れるようにもなり、綴れるようにもなり、懸賞作文にパスして御褒美をいただき、一躍して同校の先生にまで採用され、本職のドイツ語をそっちのけにして、まずフランス語を教えて飯をくったということは、一にも二にも、ただいま申し上げた勉強法のおかげです。勿論私のフランス語というのは、單に達者なだけで、口でベラベラ喋舌ったというだけで、學問としては完成しませんでした。だいいち文獻をたくさん読んでいないから駄目です。けれども、とにかく翻訳をしたり教えたりするぐらいなら、フランス語を専門にしている人達にだっ

て負けないつもりですが、悲しいことには進歩がとまってしまったので、ほんとうの實力はあんまりなさそうです。

### **Philologie と Linguistik.**

私をはじめドイツ語をやり出してから後の十年足らずの間の苦心談は以上に述べた通りですが、それから後のお話をする事になると、茲[ここ]に一寸、凡そ語學教育というものの根柢に横たわっている重大問題の一つを検討せざるを得なくなります。重大問題というのは、『文化語學』(Philologie)か『実用語學』(Linguistik)かという、殊に現下の外国語教育方針に重大關係のある、また、これから如何なる外国語をやる人にも切實な關係のある重大問題です。

まず私自身の傾向の方をハッキリと告白しておきましょう。前回までの身の上話をお読み下さった方々には、もはや別に改めて告白するまでもないことですが、私は日本にいて書物でドイツ語を勉強した人間ですから、私のドイツ語は、出発点からして、謂わば生きたドイツ語ではなかったわけです。つまり、昔の漢學者が漢文を勉強するようにドイツ語を書物の上で學んだ人間です。近頃は、殊に英語教育の方において、眼から先に這入るといったような「學問的」な教え方はいけない、耳と口とで覚えるような教授法を採用しなければいけない、という事が急にやかましく言われているようですが、そういう見地からは、どちらかという、やはり私も非難される方の陣營に這入ってしまうでしょう。

けれども、『文化語學』対『実用語學』という見地からは、私はもつと詳しく言うならば、了度その中間ぐらいの所を領域にしている、どちらかという少し文化語學の方に傾いている……といった程度のところにあります。

それから、私の実用語學(即ち、発音、會話、作文等)的方面の事も正直に告白しておきます。私のは、とにかくドイツへ行った事もないのだから、會話ができるだけでも一種の奇蹟と置いていただかなくてはならないのですが、もちろんそうスラスラと喋舌れるわけではなく、やはり一言一句かなり努力しないと云えませんが、発音も、そう大して手際が好くはない、九十九パーセントまでドイツ人のそれに近いという自信はありますが、あとの一パーセントはどうにも致し方のないところがある、十年ほど前まで度々ラジオで独逸語の放送を擔當したことがありますから、お聞きになった方は大体おわかりのことと思います。自分から言うのはおかしいが、大体ドイツ人の發音によく似た發音はします。決して如何にも日本人がやっているように聞こえる拙い發音ではない。しかしドイツ人に聞いてみると、「よく聞いているとやはり本當のドイツ人でないことは直ぐわかる」というのだから、こいつはどうも矢張りやむを

得ないものと見えます。結局二世の英語のようには行かない。  
作文はどうかというと、この方は會話とはちがって、ずっと本物です。作文は、苦心もし、時にはずいぶん時間もかけ、しらべるべきことはちゃんとしらべて書くし、おまけに文學書や哲學書その他色んな物を読んで色んな事を知っているから、作文だけは、或いはドイツ人なみに書けると言っても好いかも知れません。  
単に眼から這入ってきたドイツ語の知識を基礎にして、多少インチキであるにもせよ、どうして發音、會話・作文、即ち実用語學的方面を以上の程度にまで進歩させたかということは、これはチョット一口では説明できません。褒めてくれる人は、「語學の天才」という、ちよっと私には意味のわからない、光榮ではあるが、多少迷惑な形容詞で以て片づけてしまう。なぜ迷惑かかというと、天才という形容詞は、私のチョット一口では説明できない複雑微妙な、無限にこみ入った、單に意織と脳力と努力と苦心とによって操作して來た千態萬様の「人工的努力」と、その努力の陰にかくれた「企劃性」と「信念」とを全然買ってくれない評価だからです。否、私の語學力というやっは、豎にして眺めても横にして眺めても、「天才的」なところはどこにもない、凡て是れ意識的に、努力的に、企劃的に、ヤツトのことででっち上げ、ヤツトの事で持ちこたえている人工的なものにすぎません。たとえば、發音にしても、ドイツ本国へ行けないから、その代りに在京のドイツ人と接するたびに、一言一句相手の喋舌るのに注意して、まるで植物學者が植物を採集するようにして、いろんな知識を採集して、同時に一生懸命にかれらの發音を眞似したきりの話にすぎません。殊に發声映画はよく利用しました。同じ映畫を三四晩もつづけて見、おしまいには中の文句を半分通り覚えてしまうほども研究しました。それでも、なかなか全部聴いてわかるところまでは行かない。しかし、とにかくトーキーでは随分覚ええました。その他、既に二十二三歳の時、幸にして在京の奥人の **Leopold Winkler** 君というのが、同じ大久保に住んでいたもので、この人としょっちゅう交際することになったのが非常にためになりました。この人は今でもいますが、**du** で話す關係のドイツ人というのは今でも此の人きりです。その他、今日まで、全体として、色んな關係で話したドイツ人の數が、それでも五十人や六十人はあったでしょうか。私の會話力と發音というのは、つまり東京にいた五六十人の色んな種類のドイツ人と、それから若干のドイツ映畫とから獲得した、すこぶる人工的なものなのです。その努力と云ったらありません！或る種の細かい事となると、あんまり恥かしくて、とても公開する勇氣がありません。  
けれども、たとえどんな無理な人工的な手を用いたにせよ、とにかく私

のドイツ語には、我国の多くの獨逸語學者や大學教授緒君には大いに缺けている所の『實際語学的方面』というものが多分にあることは事實で、本來はやはりそうした人々と同じような『文化語學』即ち *Philologie* の方の畑の男でありながら、そうした畑の方に一番缺けている實際語学的方面の要素を多分に備えているということが取りも直さず私の強味だと言えましょう。けれども、私を單に実用語學者だと思っている人があるとすれば、それに對しては私としては斷然異議があります。だいいち、語學というものを専ら実用語學と解する事に對しては真向から反對ですから、その意味においては、私は或いはいわゆる「語學者」ではないかもしれません。やはり、よく言う、むつかしい事はよく知っているくせに、會話や聴き取りとなると、ごく簡単なことにすらマゴつく「學者」の方の陣營です。

だから、文化語學か実用語學かという問題に關しても、私はどちらかと言うと「文化語學」というものの方を強調したい氣持でいます。今の時勢には多少逆らうかも知れないが、一国の文化という高遠な観点からは、眞の教育家はすべてそうでなければならぬと思います。それは決して耳と口との教授法という改革に對して反對を唱える意味ではないので、それはそれで結構であり、私自身も實際教壇に立つ時にはそれを最高の原則としてやってきました(今は指定は受けていないが、とにかく士官學校を卒業して形式的には少尉に任官した履歷上當然追放だろうと言われていたので、自から慎しんで、何とか決まるまでは公職にも教職にも就こうとは思っていませんが)。(昭和 25 年現在)

では、どういう意味で文化語學の方を強調するかということをし少し言わせてもらいます。本稿は、本當は具体的な苦心談だけにとどめて、一般論はなるだけ遠慮するつもりではありますが、此の問題だけは、私自身の語學力の生成過程と密接な關係があつて、兩者を分けて考えるわけには行かないと思うので、しばらく御辛抱をねがう次第です。

まず、いわゆる *Linguistik*、すなわち実用語學というものの正体をよく觀察して見ようではありませんか。そうすれば、それが果して語學の理想であるかどうかは、すぐわかります。

私の經驗から言うと、実用語學なんてものは、眞の語學すなわち文化語學の方がしっかりしていさえすれば、わけのないものだと思います。よく言う事だが、大學で何年も英語をやったというのに、缶詰のレッテルすら読めないじやないか、と云つて大學の英語が非難されます。しかし大學では別に缶詰のレッテルの読み方を教えるわけではないから、それもやむを得ないじやないですか。

それに反して、実用語學のみを理想にして獲得された外国語には、それ

どころではない、もっともっと致命的な缺陷があります。よく見受ける現象ですが、外人を相手にどンドン話のできる人という奴の中には、もちろん本當に其の外国語をよく知って話す人もあるにはありますが、大抵の人はそうではなくて、単に日常會話の範圍の事だけがわかっているにすぎない。これが證據に、少しこみ入った話になったり、いわんや思想の發表とか氣持の上の問題とかになると、だいいち外人の方で初めっからあきらめて、てんで相手にしてくれない。そういう人が、たとえば外人同志がそうしたむつかしい話をしている席と一緒にすわらされると、まあ何てことはない、まるで落語家がオペラの役を引きうけたような恰好になる。そういう場面を私はたびたび見受けて知っていますが、實に屈辱的な……というよりはむしろ國辱と言いたい氣がします。そういう時には、何とというか、或種の義憤をおぼえます。悲憤的愛國心に鞭打たれます。戦争には何遍負けても好いが、精神的水準と文化人としての水準だけは、せめて西洋人に笑われないだけの日本人を五六萬人造らなければ駄目だと思いました。本當です。

だから、実用語學の必要を誰人よりも以上に痛感して來ていながら、しかも信念としては、誰が何と言っても我國の語學教育は文化語學でなければならないという決論を持する所以のものは、一にも二にもそうした文化的見地の愛國心から來ています。此の愛國心、此の愛民族心だけは一錢の掛値もありません。

私は決して右翼的思想をもった男ではない。また左翼的でもない。どちらかというとな國際的自由主義者、あるいは御人至上主義的ニヒリストです。けれども、どんなに清算しようとしても清算し切れない過去の野獸が少しばかり意識の底に残留している……それは愛郷心です、日本人としての自尊心です。こいつだけは觸らないでソーツとしておいてもらいたいのです。しかしマア、こんな話はやめましょう、くだらない事だから……

実用語學的行き方は、勿論中學あたりから盛に採用しなければなりません。けれども、それは直ぐ缶詰のレツテルが讀めたり西洋人と話ができたりする事が理想であってはならない、やはり結局は文化語學、すなわち主として「書物が読める」ことが最後の理想でなければならない。書物さえ読めるなら、なんなら會話や作文はできなくてもよろしい。少くとも、全部のインテリが會話や作文ができる必要はない、しかし書物を読むことだけは全部のインテリができなくてははいけない！これが私の見地です。

如何となれば、外国語と一口に言っても、文化的背景を持った獨英佛等の語學をやる場合と、ホッテントット語やズールー語やダコタ語やエス

キモー語をやる場合とは、やる目的が全然ちがうと思うのです。それとも違わないでしょうか？

もちろん、書物は読めるが、會話も作文も碌にできないというのは、たしかに片輪には相違ありません。けれども……書物が読めないよりは好いじゃありませんか！

とにかく、ちよっとしたツマラナイ事のために最も重要なことを忘れてはいけません。大學の教授のくせに會話一つ出来ないとか、語學者でありながら發音がなっていないとか言いますが、では、我國の文化、我國の科學を、せめて今日までの程度に向上させたのは誰の力だと思います？ 外人ガイドや、横浜の人力車夫や、米兵専門のパンパンや、その他外人を相手にペラペラと軽快に話のできる人たちの力でしょうか？ もしそうなら、もっと外人と接觸する機會の多い、ジャワ人や仏領印度人や、その他植民地の原住民の方が我々よりはずっと西洋人の脳に喰い入って、我々よりもずっと西洋文化の水準に近づいていた筈です。

そうではない、我國の文化水準をせめて今日の程度にまで引きあげたのは、すべて是れ、本は讀めるが會話となると頭を搔いて馬脚をあらわす醫學者、科學者、思想家、翻譯家、文人 大學教授。その他の片輪語學者であったのです！ すなわち「文化語學」をやって來た人たちなのです！ だいいち、語彙や表現からいっても、實用語學ほど貧弱なものはありません。それに反して、書物に出て來る外國語が、これが本當の英語、本當の獨逸語です。(話される言語が本當の言語だという説は、もう古いといっって好いでしょう)従って、この方は、そう簡単には支配できません。長年の勉強を要します。しかしそれはむしろ當然でしょう。

語學というものを軽便に考えている人は、もう一度昔の漢學者の立場にかえて、その眞の目的を深く反省すべきです。でない、西曆 2049 年頃には、極東の地圖はすっかり色が變ってしまいますよ。

以上は、事いやしくもドイツ語に關する限りという前提で申しあげたのです。ホッテントット語となればまた少し話がちがって來るかもしれませんが、私はホッテントット語の事は知りません。

以上は、文化語學の見地から、すこし實用語學のことを悪く言いすぎましたが、今度は、また苦心談の方へ戻って、會話とか發音とかいったような方面でどんな苦心をしたか、事實を主にして申しあげます。

### 會話と作文

會話や發音で一番苦心をしたのは、ドイツ語ではなくて、一番最初は先ずフランス語でした。わたしのフランス語は、陸軍の學校にいる當時に、ほんの少々嚙ってはいたのですが、ほんとうに本腰を入れてやり出したのは、任官と同時に陸軍をやめさせられてから後のはなしです。(それ

でも、士官學校の當時、内緒で Tolstoi の小説の佛譯を机の中に忍ばせていて、そいつを週番士官……井伊中尉といいましたが……に見つけられて呼び出され、おまえは無政府主義かといってヒドクどなりつけられたことがあるところをもって見ると、既に士官學校の時にも、或る程度までは読めるようになっていたものと見えます……ところが、フランス語をやりながら、まだ一度もフランス人の發音という奴を聞いたことがなかった。そこで、陸軍をやめさせられると同時に、神田のアテネ・フランセというフランス語の夜學校に入學しました。その時には、書物だけではモウ大抵のものは読みこなせるようになっていました。その前の二年間ほどは、ちょうど暇があったので、わかってもわからなくてもとにかく一日に百ページ位のフランス語は必ず読むことに決めて勉強し、その上おまけに一日に半時間ぐらひは、既に前に申し上げた、「二三行の文章を一度眼を通したきりで、中に少々わからぬ單語があつても、すぐそれをペラペラとそらで言えるようにする」という練習時間を設けて、とにかくそれを二年間つづけて強行したものですから、その間のフランス語の進歩は實にすばらしいものでした。既にドイツ語を七八年もやった後のことですから、その点もあつたでしょう。

要するに、アテネ・フランセに入學するときには、發音はほとんどチットも知らなかったが、読む方は相當進歩していたのです。ですから、初めからすぐ高等科に這入りました。高等科は、校長の Cotte さんの担任で、もちろん全部フランス語でしゃべります。正直に言うと、最初の二三時間は、何を言っているのかちつともわかりませんでした。生れてはじめてフランス人の發音を聞いたのですから無理もない話です、しかも時々質問を向けられる。随分弱りました。

けれども、不思議なもので、四時間目五時間目あたりからは、よくわかり出しました。まるで……謂わば霧が晴れて隣の家が見え出すようにスーツとわかり出したのです。わかり出すと、一言一句刻明に理解できる、しかもそれが四時間か五時間目です。

これは全く、その前に書物の上で二年間ばかりミッチリ勉強していたお陰です。それと、既にのべた「長い文章を其の儘暗記する」という練習方針が効を奏したのです。

殊に強調して申しあげたいのは、實際語學というものは、既に書物が充分読めるようになってさえ居れば、まことにわけもないものだといふ此の一點です。私は、自分の経験からして、断乎として此の点を主張したいと思ひます。『もし頼山陽が支那へ行ったとしたら、おそらくは一年でもって實際の支那語ぐらひはすぐ出来るようになったらう』と。

というのは、わたしはアテネ・フランセで實際發音を習うこと約二三年、

三年目には、前述の Cotte 氏にみとめられて、少しおぼつかなくはあったが、とにかくアテネ・フランセ式の直接教授をやる講師として同校の教壇に立ったのです。なぜみとめられたかという、べつにそう大して実用語学としてのフランス語が特別によく出来たというわけではないが、とにかくドイツ語の方で相当西洋の精神文化を吸収しているし、その上おまけに二三年間強行的にフランスの書物を讀んでいるから、どことなく「精神水準」がちがっていたので、學者タイプの Cotte 氏のことですから、つまり其の點を買ってくれたのではないかと思います。山田吉彦氏もその当時 Cotte さんの所にいましたが、此の人もやはりそういう意味で買われていたものだろうと思います。單に發音が好いとか、實際的語学がしっかりしているとかいう点では、そうっては失礼だが、私も山田吉彦君も、たとえば丸山順太郎先生のような人には、たとえ逆錐立ちをしても、とても叶うまいと思いました。

これから少々ボロ話になるが、アテネ・フランセの教壇では、まことに血の出るような苦勞をしました、とにかく、フランス語の ABC からして教えるのに、日本語は一切使わないで、初めっからフランス語でやるというのだから、新米の私にとっては、實に目もあてられない苦勞です。一時間中、つづけ様にフランス語ばかりでしゃべり、それに手ぶり足ぶりを交えて、つまりフランス人に成り切って、しかも ABC から教えるというのですから。つまり一種の芝居ですな。……しかも、教えている最中、扉の外には Cotte さんが、洒落ではないがコットコットと靴をならしながら廊下を歩いていて、一言一句に注意してきいている。そして授業を了えて出てくると、すぐ私をつかまえて、あなたの difficile の發音はまるで difcile のようにきこえる、fi の i をもっとハッキリと聞かせなければいかんとか、あなたは commencer de ……と言ったが、commencer の時は de ではない、à ですよ、とか……あるいは、「此の瞬間に」は à ce moment ではない、en ce moment ですよ、à ce moment だと「その瞬間に」になってしまいますよ、とか何とか……とにかく一回の授業について五つか六つの誤りを指摘される……なるほど、會話や作文になると、よほどしっかりしていないと、一人前には行かないものだというのを、骨身に泌みて痛感したのは此の時です。

こうして、盛に誤もおかし、いろいろと恥ずかしいことを経験しながら、此の直接教授のおかげで、單にフランス語のみならず、私の本職たるドイツ語の方についても、私は根本的に反省させられました。自分ではずいぶんわかっているつもりでも、どんな簡単なことでも、それを責任をもって人に教えるとなると、よっぽどハッキリした確信がないと駄目だという点にです。

けれども、とにかく、Cotte さんに仕込まれたおかげで、實際語學としてのフランス語は短時日のうちにおどろくべきほど進歩しその後、外務省の翻訳課に勤めた時には、とにかく曲ったなりに相当複雑な外交文書の佛訳をやって、最初はずいぶん直されたが、おしまいにはわたしの案の通りに通過することもあったのですから、自分ながらおどろきました。もし私に文化的野心がなかったら外務省に勤めたままになって、今頃はおそらく翻訳課長にでもなっていたところでしょう。けれども、フランス語は単に教養としてやるつもりで、ラテン語やギリシャ語と同程度にしか考えていなかったのだから、外務省は、映畫の方に仕事が見つかると同時に止してしまいました。もっとも、その時にはまだ、まさか語學が本業になるとは考えていなかったのだから、理想は「哲學あるいは演芸」という、ちよつと私一流の變なところにあつたのです。

演芸といったから、此の方にも一寸触れないと苦心談が完全になりますまい。フランス語をやりながらも、いちばん興味をもってやったのは、アテネ・フランセの校友会で催されるフランス語のお芝居でした。あの當時の人はまだ今でも多く健在でしょうが、ずいぶんインチキなフランス語で盛に Molière や Labiche などをやつたものです、小生自身も、餓鬼大將を以て自任していたから、何かというとすぐ主役を引受けてやつた。大抵フランス人の半専門家がいて、発音をやかましく訂正してくれるので、語學の方でも非常にためになりました。だから、自慢するわけじゃないが、佛語の発音だけは、佛語を専門にしている現在の大家にも負けないつもりです。語學力では、長年進歩せずにいるから、或いは大したものではないかも知れませんが、発音だけの話です。(けれども、長い間使わないとやはり駄目になるものと見えて、今ではモウ佛蘭西語の會話となると、あまり自信がありません。やつと用事が言える位のところでしょう。)

もう十年以上も前の話だが、誰がどう傳えたか、私の事を博言學者のように吹聴する人があつて随分迷惑したことがありました。つまり、獨逸語ばかりではない、フランス語も英語もイタリイ語も、西洋の言語は凡てできる、その上おまけにラテン語、ギリシャ語、サンスクリット、ヘブライなど古典語までやる……というわけです、雑誌などにも、極く無責任な筆つきでそういう意味の事を書かれたので、こいつには困りました。

なぜ困るかという、其処につき前號でのべた *Philologie* 對 *Linguistik* の問題があつて、*Philolog* (文化語學者)を以て任ずる私としては、そんな澤山の言語ができるように言われると、世間的には一種のインチキ師になってしまうからです。人間一個人の限りある一生涯と、その限りあ

る一生涯において成し遂げ得る頭脳の業績との間の関係を極くアイマイに考えている世間人は、「あの人は何ヶ國語ができる、十何ヶ國語ができる」などということをして、何の条件もつけずに平氣で言いますが、これは実におかしな話です。なるほど一人の人間が何ヶ國語も自由自在に駆使するという例は、古今東西に亘って決して稀なことではありません。けれども、それは必ず **Linguistik** であるに相違ない。たとえば、低級 **Linguistik** の範圍、すなわち會話をしたり日常の意思を達したりする範圍でなら、数ヶ國語をマスターしている人は世界に何百萬もいます。それを商賣にするとすれば、三十ヶ國語ぐらひは一生のうちにマスターできるでしょう。けれども、既に高級 **Linguistik**（實用語學の少し毛の生えた程度のを斯う呼んでおきましょう、これも結局大したものではないのですが……）の範圍、即ちたとえば新聞を読んだり、國際會議の通譯をしたり科學書の翻譯をしたりするとすると、もう何十ヶ國語とは行きません。天才でも五六ヶ國語が精々でしょう。普通は高々ニヶ國語、三ヶ國語で、四五ヶ國語というとならば誰でも多少疑うのは當然です。……要するに、そう沢山の言語ができるというのは、凡て **Linguistik** のことで、本當に深く研究するとすると、即ち眞の **Philologie** となると、もうニヶ國語だって無理です。たとえば私の場合で言うならば、独と佛とを同様に深く研究しようとする、それはモウニ兎を追うことになります。如何となれば、眞の **Philologie** は、單に言語ばかりではない、その言語で書かれた凡ての文學、學問書、風俗習慣、歴史等をはじめ、日常生活の **Linguistik** をも含めたありとあらゆる事柄を立體的に包含するのだから本物にはなり得ないからです。ドイツ語の場合でいうならば、**Philologie** としてのドイツ語は、たとえば昔の漢文が漢文學、儒教、支那文化、佛教文化の全部を包含したごとく、ドイツ人の頭が生み出した有りとならゆるものを全部包含します。ドイツ語はドイツ語だけではないのです。**Philolog** としてのドイツ語學者は、單なる語學者では勤まらないのです。（度々申す通り、獨逸語、英語、佛語、などは、ホッテントット語やエスキモー語ではないのですから）なによりもまず文學者、藝術家、哲學者、思想家でなければならぬ、その上科學のことも知らなければならぬ、制度文物の知識もなくはない、その上おまけに日常會話も、作文も、発音その他の具体的な **Linguistik** にも相當の自信がなくてはならない……それら凡てを基礎とした上に築かれたものでなければ本當の **Philologie** とは言えないのです。…

そんな意味における語學が、人間一生の中に、二ヶ國語以上に亘って出来るでしょうか？

私は断じて申します：それは絶対に不可能です。もしそんな事が二ヶ國

語以上できるという人があったら、そこにはインチキがあります、本當に天才なら、そんな馬鹿な努力はしません。そんな事を企らむ人があるとしたら、それはその人が天才でない証拠です。

もつとも、たとえばドイツ語をよく理解し、その根本を究めんがためには、英佛のみならず、ギリシヤ、ラテン、其の他できるだけ多くの同族語を多少かじる必要はあります。學問はすべてピラミツドの如きもので、基底が広くないと高さが生じないのです。そうした要求から私も仏語その他をやりました。英語も、讀むだけは少々読めます。けれども……数カ國語が『できる』とは言われたくありません。『できるとは何ぞや?』と反問したくなるからです。

#### 暗記と記憶に関する私見

フランス語に凝って、一番自信のあるドイツ語を一時おろそかにしたのは、二十歳から三十歳までの間でしたが、その間には、同時に芝居の方に凝ったり、生活に困って翻訳をしたり、その他色んな道楽をして、本職とは全然無關係な方面に足を踏みこんでしまいました。ところが。語學というものは妙なもので、結果として見ると、無關係なことが一番關係があるということが只今になってよくわかります。只今になって考えてみると、おれはどうしてももっともっと色んな事に首を突っこんで置かなかつたらうかと、むしろ脱線の少なかつた事を恨んでいます。私は只今では獨逸語を以て畢生の努力の對象とする傍、全然ちがった方面では、自信を以てやれる事といえ、演劇だけです。もはや此の年をして商売道を習う自信もなければ、改めて科學者を志す元気もない。本當は弁護士なんてものや、社会運動や、その他色んなことがやって見たい。けれどもそれはもう駄目です。

語學語學といつても、語學という奴は、深く人生の『事柄』と關係しています。卑近な例を取るならば、單語一つ覚えるにしても、自分の頭に關心のない事は、覚えることが出來ません。たとえば「氣分」、「氣持」ということをドイツ語で *die Stimmung* といいます、この單語を教室で學生に向つて丁度適當な機会に黑板にでも書いて教えてごらん下さい。そして、それを試験問題に混えて出してごらんになるが好い。五十人居れば、おそらくは四十五六人はみんな忘れてしまっているでしょう。しかし、四五人、それを不思議に記憶していて、待っていましたとばかり正解する學生がいる。その學生がどんな人間であるかを調べてごらんになるが好い。その學生は必ず何か芸術とか芸術論とかいったような事に深い關心を持っていて、とにかく「氣分」という概念に何等かの深い關係のある世界に生きている人間です。これはほんの随意な一例ですが、要するに單語の暗記ということは、普通人の考えているような、單なる

「暗記力」の問題ではありません。「頭が好い悪い」の問題ではありません。その人間が人生諸般の現象に對してどれだけ深く、どの方面にどれだけ強く關心を持っているかによって「暗記力」がきまって来るのです。少し別な例で言ってみましょう。単語の暗記(従って文章、句などの理解)は、たとえば言えば人の顔や名前をおぼえるようなものです。自分に何の関係もない、痛くも痒くもない人名を二十も三十も並べてそれを全部おぼえろと言われたって、それは一時間みつめて居たっておぼえられるものではありません。これは私自身実験のつもりで一寸やってみて見たことがあります。法政大學にいた頃の話ですが、いよいよ入學者が決定して、獨逸語を第一外語として私のクラスへ這入って来る學生の名簿ができ、おまけに寫眞入りの學生證までちゃんと整理されたので、私はちょっとしたワルサをしてやろうと思い立ちました。ワルサというのは、學生と初めて接する前に、寫眞と名前とを對照して、クラスの七八十人の顔と名とを頭の中でくっつけてすっかり覚えてしまつてやろう、そして、初めて教壇に立った最初から、いきなり初對面の學生をつかまえて、おい何々君！なんて指名して、「おや、此の先生はモウ初めっから一人一人の顔を知ってるぞ……こいつはウツカリできない……」という風に頭ッからちじみ上げるようにしてやろう……

そんな事を考えて、およそ三四時間もかかって、まるで皆さんが単語カードを暗記なさるように、ちよつと見ては眼をつぶり、また一寸見ては眼をつぶって、一生懸命に寫眞と名前とを暗記したものです。

その結果どうだったかと言うと、いざ教壇に立って見ると、七八十人のうち、たしかにおぼえていたのはほんの四五人だけで、しかも、その中二人は、呼んでみると「ちがいます！」という。つまり前田を前川と言ったり、古屋だから「フルヤ」かと思ったら「コヤ」だったり……いやどうも完全に失敗！

単語カードで無理無態に単語を詰めこむなんてのは、結局これと同じことではないでしょうか。

それに反して、既に關心が生じている所においては、人名は何の努力もせず、しかも何人でもおぼえる事ができます。美人だな、と思った女の人の名は、一ぺん聞いただけで一生おぼえているでしょう。むしろ忘れるのに苦勞するでしょう。また、自分にむかって何か失礼な言動に出た相手の男の顔は、一瞬にして強く腦裡に刻みこまれ、その名、その聲とともに、もはや拭わんとして拭うべからざる絶対確實な単語知識としてあなたの蘊蓄の一部に編入されます！

片言、斷句、文章もまた然り。感情問題に關係した書簡なんてものは、よっぽど文句に注意しないとイケないというのはつまり茲なので、相手

の本當に関心のあるところに觸れた「痛いこと」または「お世辞」というやつは、あなたは別に大した考えもなくお書きになっても、それを読んだ相手の人は、まるで必ず試験に出るときまった「やま」の箇所を教えてもらった學生のように、一言一句を脳裡に刻み込んでしまいます。ただ學生の試験勉強とちがうのは、學生は頭痛鉢巻で五六行の文句を詰め込むのだが、痛い所に觸れた、あるいは擽ぐった所に觸れたお世辞や悪口は、別に頭痛や鉢巻をするまでもなく、まるで吸い込まれるように二度三度四度とそれを読む、そして四度も読むうちにはすっかり其の用語から云い廻しまで完全に自分のものになってしまつて、うっかりすると、それとは何の関係もない文章を書いている最中にも、ちよつとも似た場合になるとすぐ其の文句が出て來るものです。

以上はほんの一二の例にすぎませんが、此処に『暗記力』という現象の心理的根據があるので、その法則を一言に要約するならば『すでに自分の關心が潜在的に耕やされつつある方向に関係した單語は、待っていましたとばかり頭にこびりつくが、まだ自分の關心範圍に其の該当物のない單語は、どんなに努力しても、どんなに頭の好い人間でも、たとえば胃袋と食物との関係のように這入る量は高がきまつており、また一度這入ってもすぐまた忘れてしまうものだ』……こう言えましょう。だから、自分の關心とは何の関係もない單語は、頭の好し悪しに関係なく、まあ一日に十語ぐらいしか覚えることはできません。百おぼえても九十は必ず忘れます。一日に十語とすれば一年に三千六百五十です。五年でも十年でも大したことはありません。そんな貧弱なおぼえ方では、とても一生のうちに一つの語學をマスターすることはできないでしょう。(一寸断っておきますが、一日に十語といいましたが、詳しく言うと、たとえば **kommen** にはおそらく百以上の用法がありますから、こんな單語はすべて百語以上として勘定することになります。in や an などになると五百語乃至千語として見なければなりませんまい……)

#### 「關心」と「慾」が決定的要素

ですから、一日に十や二十の單語をおぼえていたのではおっつかないのので、全体として見ると、その三十倍か四十倍を覚えて行かないと五年乃至十年のうちに少し読めるといふ程度にすら達しません。そうした奇蹟がどうしてできるかという、それが即ち關心との結びつきなので、一頁の原文を読んで十五六の單語を引いたと思つても、実は關心の無意識な力によって、その頁では恐らく五十や六十の新らしい事を覺えているのです。その無意識的におぼえる一頁に何十という新知識は、それが三十になるか、四十になるか、或いは五十になるかという事が何で決するかという(問題は此處ですよ!)それは決して「腦力」が決するのでも

なければ「熱心さ」が決するのでもありません。不知不識の間に吾人の刻々の意識を色づけて行くところの、『潜在関心』が之れを決するのです。原文を読んで解るとか解らんとかいうのも、すべて此の『潜在関心』から來ます。此の潜在関心なるものが、物慾や性慾や自尊心問題と同程度に、人生の有りと有らゆる方面に隱然として高圧電線網のごとき關心網、痛痒網を張りのぼしている人間のことを、その電圧の強度と其の網の範圍に準じて、之れを『頭が好い』、『天才だ』あるいは『頭が悪い』、『凡才だ』と名づけるきりの話です。

たとえば、春機發動期にある青年諸君は、或種の話を一寸聞いただけで、われわれ老人にはとても及びもつかない猛烈な潜在力を以てピンと反応するでしょう？それが天才です。……當局の眼をくぐって悪い事をする人々は、或種の事柄に關してはあなた方無邪氣な人たちの及びもつかない頭の好さを持っています。これが(その或種の事柄に於ける)天才です。……自分に切實な關係を持つ事柄においては誰もが天才なのです。自分に直接何の關係もない問題においては、ニュートンだって低能兒以下でした。

そも人間なるものは、自分にとって痛くもなければ痒くもないといったような縁遠い事柄に対しては恐ろしくおめでたいが、少しでも自分にとって痛くもあり痒くもある事柄にかけては、その事柄に關する限り、おそろしく頭が好くなるとしたものです。ある事柄における天才凡才の差とは、要するに、その事柄に対する吾人の痛痒の程にすぎません。天を作すは痛にあり、才を爲すは痒にあり……痒を離れて才なく、痛を去つて天なし: わたしは斯く信じます。

ところでさて、その痛、その痒は何處から來るか？その痛を以て生まれ、その痒をもって育つのは、これはやはり「天」ではないか？という人があるかも知れんが、此の問に對しては私は簡單にかく答えたい：それは蛇のような心から來ます。われわれ凡てが(嗚呼あまりにも)豊富にめぐまれて此の世に生れて來る空おそろしい、毒々しい、氷速に得体の知れぬ「蛇のような心」から生れて來ます。維摩經に曰く：「痴愛を滅せずして明脫を起し、五逆の相を以て而も解脫を得」と。私は此の「而も」(obgleich)を「故に」(weil)と變えてかく言いたい：「痴愛滅せざるが故に明脫を起すなり、五逆の相を以ての故に解脫を得るなり」と。

此の關係は、深く抉つて述べるとなると、いくら書いてもきりがありませんが、その暗記力というものとの關係は実にすこぶる明瞭でしょう？『若い時にもっと道樂をして色々と脱線しておけばよかった。』と言つたのは此の意味です。

これは語學者としての私の私見ばかりではない、およそ一つの専門の使

命を完全に果そうとする人は、すべてこうした歎きを持っているのではないのでしょうか？人世の事というものは、何が何とどう関係しているか、そう簡単には言えません。凡ての部門が凡ての部門と凡ての関係に立っている。深く一事に徹底せんがためには、深く一事に徹底してはならないのです。すべての範囲をを抱擁せんがためには、凡ての範囲を抱擁してはならないのです。幅を広く取らんがためには、まず一ヶ所を深く穿つことが必要です。一ヶ所を深く穿たんがためには、できるだけ幅を取ることが必要です。如河となれば、幅は幅に非ずして、奥行き的一种からです。奥行きも亦実は奥行きに非ずして、単に幅の一種にすぎないからです。如何となれば、問題は面積の大を狙うにあるのですから、幅と奥行には、別に幅としての絶対価値、奥行としての絶対価値というものはない筈です。

まるで禪坊主の寝言みたいな事になってしまいました。単なる一語學者としての私の、此の『半生観』は、おそらくは脳力を資本にして仕事をするあらゆる専門に共通な修身ではないかと思えます。こんな事は、実は誰も教えてくれなかった。私自身、色々と失敗し、色々と迷ったあげく、もはや取り返しのつかない只今となって、ハッキリと此の認識を得たのです。こういう切實な一生政策と申しますか、生涯經濟と申しますか、とにかくこうした修身こそ、たとえば大學などに好い先生をおいて、學問をする人間だけを別けて、自分の一生を最も有効に利用するように、徹底的に予備訓練をすべきではないのでしょうか？

けれどもまあ、考えて見れば、私などは、ずいぶんヘマな事をしながらも、幸にして三十歳になる前にハッキリと自分の一生の最も有利な、最も自分の条件を完全に効かす方策を決定して深く心に決するところがあったから、まあ上手にやった方の部類かも知れません。けれどもとにかく、語學者になるにしては、あんまり出発点が狭すぎました。哲學と文藝と芝居とが傍系的専門じやあ、語學者も大したことはありません、うっかりすると単なる Linguist になってしまう。それかあらぬか、現にわたしをそう見て居る人もかなり有るようです。そう思うと、私の元來考えていた Philologie の理想も、わたしという人間を材料としての實驗に關する限り、(これを自認するのは甚だ情ないが)今回はまず不成功だったかも知れません。また來世にやり直しますか。けれども Philologie の理想だけは理想として買って下さい。

今回のお話と関連して、私の Philolog としての座右の銘を御紹介します。文豪 Schiller の言で、ドイツ語は少しむつかしいがまあ研究して下さい、それは：

Wer etwas Großes leisten will, muß tief eindringen, scharf unterscheiden,

vielseitig verbinden, und standhaft beharren.

訳して曰く：大事を遂げんとする者は、徹するに深く、辨ずるに鋭く、獵るに広く、持するに剛なるを要す。

私は、以上の第二と第四とだけで多少の成功を収めました、第一と第三とでは完全に失敗しました。

今度は、少し眼先を変えて、時間の利用に関する経験談をしましょう。

### 時間の利用

いわゆる寸暇を利用するという件では、私はずいぶん素ばしこく立ち廻って来たつもりです。古典語にまでも手を出して、ラテン語を相当深く、ギリシャ語はそれよりはやや浅く、最後にはほんの少々梵語を嚙るに至ったのは、まったく寸暇利用のおかげです。ギリシャ語に至っては、書齋に坐ってまともに勉強したことは一時間もなかったと思います。つまり全部、電車の中で、それから授業の十分間休憩などにやったのです、そのため普通なら二三年で出来ることに二十年ばかりもかかってしまいました、その代り本職のドイツ語その他には何の影響も與えずに、全然寸暇だけの収穫としてギリシャ語が多少わかるようになったわけです。ラテン語は、アテネ・フランセで學び、あとでラテン語の講師として同校の教壇に立ったので、教室で恥をかいては大変と、これは家でも相当勉強しました。けれども、アテネ・フランセでラテン語を教えたのは、やはり同校の直接教授式メトードで、教室では一切日本語が許されず、フランス語でもってラテン語を説明したり訳したりしたものですから、私の関心が主としてフランス語の方にあつたので、フランス語は進歩したが、ラテン語は一向進歩しませんでした。學生がむずかしい引用句などをもって質問に来ると、得意のフランス語で洒落を言いながら笑わして追っ払ったことが度々あります。ひよっとすると、そんな人がいて、此の記事を讀んで苦笑しているかも知れないから、申しわけの爲に付記しますが、あれから後に本当にラテン語に凝り出したので、今の私のラテン語をあの程度のもんと思つては困ります。あれよりはずっと進歩しています。

少し脱線しましたが、寸暇の利用というと眞先に思い出すのが、話は少々尾籠になるが、便所という奴です。便所にしゃがむ數分間乃至十數分という奴は、人間一生を通ずれば、随分の時間になるでしょう。しかも、量的にのみならず、質的に言つて、使所にしゃがむ時間というやつは非常に貴重な時間です。娑婆にいる間は、色んな意味で氣がソワソワしていますが、一旦別荘へ這入つて臭い飯ならぬ臭い空氣に接すると、實によく氣持がおちつきますからね。此の面壁十分間の座禪をどう風利用したものかと二十歳頃に考えはじめ、最初は単語帳など作つて持ち

込んでみましたが、そのうちには、単語暗記などというくだらない事をするには、此の選ばれたる十分間は餘りにも勿体なさすぎる、これはもっと何か有意義な事に利用しなければ嘘だと気がつき、そのうち遂に考え出したのが、便を催したならば早速堂々と書物をふところにしてでかけるという策です。但し別に本を読むというのではなく、平素本を読む時に、これは面白いと思って赤鉛筆で印をつけた所や、どうしてもわからなくて長い間考えた個所などを開いて、ほんの数行を睨んで考えるという道楽です。娑婆でどうしてもわからなかった事が、面壁十分間のうちに豁然[かつぜん]として解るという事もずいぶんありました。また、面白いと思って赤線を引いておいた文句を(もうだいぶ昔のもので殆んど忘れかけていたのも出てきますから) 静かに読みなおし深く考えながら味わっていると、今まで全然注目しなかった一大世界が眼前にひらけ初め、便所の壁が二つに割れて無限の樂園の前に安坐したような嬉しい氣持に見舞われることもあります。とにかく、色んな意外なことがあって、一つ一つ述べるわけには行きませんが、いずれにせよ、思想を深めるという点では、端倪す可からざる収穫があるのです。嘘とお思いになるならやってごらん下さい。とにかく、本を読んでいるときに、これは面白い、これは一度よく考えよう、これは俺に重大な関係がある、などと思って赤線を引くのは誰でもやることですが、おいしい事には、大抵の人は、それをよく味って考えなおすという事をしないで放っておくのではないのでしょうか? そのためには、面壁十分間の臭い空気をおいて外に適当な空気はありません。少くとも私は、便所がそれに一番向いていると思います。沈思黙考などと言いますが、まだしっかりした具体的内容を持たない若い者の沈思黙考なんてものは、うっかりすると漠然たる、とりとめのない、大して自己を扶る所のない、それどころか、ややともすれば放心虚脱にすぎない散漫なものになりがちです。私もそうでした。ところが、何か書かれた文章とその意味を出立点として自己に与えると、そこには自分でもおどろくほどの心境の発展が生じます。その上おまけに、語學を中心とする考え方の進歩はすばらしいものです。つまらない記事を百頁読むより、或種の赤線づきの文句を一行二行使所で睨んだ方が語學はずっと長足の進歩をするものです。

ただし、段々と年を取るに従って、若い時のように一瞬一刻を功利的に打算的に考えるということをしなくなりました。それと、途中でだいぶ心境の變化もあり、また、自分自身の自主的見地から色々考える事が多くなったせいもありましょう、そうした寸暇の利用は、十年ほど前からは少しだらしくなりました。ただ、面壁十数分という奴だけは只今でも大好物です。最近まで、信州の妻籠(木曾谷の村)という所に疎開

していましたが、天氣の好い日には、汚ない軍服を着て山をひとりで歩き、山の一番高いところで下界を見おろしながら野糞を垂れるのが唯一のたのしみでした。どうしてそんなに巧い具合に便が出るかというと、そこは実によくしたもので、相当長い坂をエッチエッチと登ってゆくと、頂上に達した頃には大抵うまい具合に便を催します。これはどうも一般的法則らしい。現に私たちの借りて住んでいた家が、木曾川の岸から「あららぎ川」という溪流に沿うて八九丁もダラダラ坂を登りつめた一番最後のところにあるのですが、此の坂を登って妻籠村へやって来る荷馬車の馬が、私の家の前あたりまで来ると必ず立ちどまって糞を垂れる。その度に塵取りをもって出て其の金色燦たる祝福を推し進んで裏の畑へ持って行くのが私の仕事でしたが、此の馬の氣持は私によくわかる。私もその通りで、今日はあの山の天頂で野糞を垂れてやろうと思って出掛けると、上に着いた頃には豫定通りチャンと陣痛を催すのです。

#### 放心と、老後の生活態度

山頂の野糞の味！ドイツ語とは直接何の関係もないが、前にも申した通り、凡そ人生の事たる、何が何とどう関係しているかわかったものではなく、ドイツ語も或いは括約筋あたりで野糞と関係していないとは誰にも斷言できないし 括約筋に関する研究だってまだ其處まで進んでいるわけでもなかろうから、野糞に関する講釋も一応は聴いて下さい。あたりに人無き山頂のことゆえ、敢然ケツを捲って、四方八方から丸見えのところにしやがみます。そして悠々と下界を見おろし、煙草を吹かしながら時の到るのを待ちます。時が到るといって、それと覚しき例の胎動が感ぜられ、やがて前衛、あるいは既に本隊らしき大部隊の進出がはじまる。するとサア、出るわ出るわ、まるではらわたそのものが下りるのではないかと思うほど、輻輳[れきろく]として、チューブも裂けよとばかり繰り返される。その繰り返された蜿蜒長蛇のごとき縦列が、一巻き一巻き又一巻きと、たくましき左巻きに幾回となくとぐろを巻いて、巻き終った最後が、やや筆がかすれて『終りツ！』といったようにピンと上へはね上った頃の下腹部の氣持よさ……茫然自失というか、恍惚奪魂というか、羽化登仙というか、寂滅爲樂というか、涅槃というか、虚脱というか、……とにかく天地自然の心に解け込んでしまったような氣持です。

藪の陰でソツとやる野糞なんてのはあんまり感心しませんな、大きなひきがえると對坐して畏まって見たところではじまりません。四方八方まる見えの山頂でケツをまくって、「あの邊には人間とか何とかいう碌でもない野郎が碌でもない事で騒いでいやがる」と思いながら下界を見おろしてきばるところに快感があるのです。

野糞がドイツ語の苦心談とどう関係するか、と問われると、これはチヨット……困りますな。しかし、全然何の関係もないわけではない。たとえば、わたしのように、寸暇を利用する事を徹底的にやり通して来た人間には、ある年配になると、當然反動がおこってくるもので、すべてを打算的に考えていた努力努力の時代は、十四の年からかぞえて、四十年とはつづかなかった。最近、そんな生活とは少しちがった方面に重点が傾いている……という、ちよっと一口では申しあげられない複雑微妙な事柄の象徴的表現だと思って下さい。

### 睡眠

次は睡眠のこと。わたしは八時間乃至十時間はたっぷり眠ります。寝の足りないときには、半時間でも一時間でも思ったときに晝寝をすることができます。法政大學に勤めていた頃には夜が主として勉強時間だったので、学校の晝食後の三十分は必ず涎を出して晝寝をしました。野糞と同様窮屈な状態でやる晝寝という奴は、好い氣持なものです。當時法政大學で同僚だった星野先生というのも、よく晝寝をしておられたが、この人もかなり努力して勉強する人でした。努力して勉強する人間はみんな思った時に随時うたたねが出来るようになるのではないかと思います。不眠症になやまされたなどという例は一度もありません。

以上のように述べて来ると、よく反省してみると、私自身の描寫法が少し歪んで来たような氣持もしないではありません。わたし自身、ほんとうに今まで述べて来たような、打算的に功利的によく考えた勉強法をして来たろうか？色々な事実をよく考え合せて見ると、其處には色々例外があったような氣がします。たとえば、芝居がはじまったり、その他何か勉強の日常生活を掻きまわしてしまうような突発的なことが起ると、まだ氣の練れていなかった私はその騒ぎがすっかり静まってしまふまでは、どうしても勉強が手につかなかったことを記憶します。こんな事では駄目だと思って、精神修養のつもりで、嵐の最中に本をあけて見ても、やっぱり駄目です。そのかわり、静かな勉強生活がかき亂された時には何時も感じたことですが、『事務的な才能』、すなわち、どんな大騒ぎの最中にも、頭をハッキリとさせて事に對處し、その時その時の緊急要件をテキパキと捌いて行くという能力は、自分ながらおどろくほど發揮することに気がつきました。またそれが面白くやっけて行けるのです。私の知っている範圍のいわゆる學者連にはそうしたところがなく、世間を大して知らず、書齋の勉強ばかりしている筈の私の方がむしろそうした事を樂しむ傾向があるところを以て見ると、私という男は、學者肌の男なのではなくて、むしろ實際家肌の男なのではないかと思ひます。

### 肌の相違

……ただ私に完全に缺けているのは、人の氣持に取り入って、上長とともに巧く事を運んで行くという才能です。大將にさえなっていれば巧く行くが、誰かに命令される立場になると必ず或る時になってケツをまくってしまう。二十年時代に陸軍を止したのもまず其の手はじめ、それから外務省の翻訳課も二年足らずでケツをまくって、当時の人事課畏さんに一寸御迷惑をかけた(まだ健在でいられたら此の席で改めて陳謝致します)、それから映畫界の先駆者である歸山教正氏の配下にいた時も最後はちょっと喧嘩腰みたいな事になって同氏を困らせた、それから土方氏などの例の「指鬢外道」とかいう芝居の時も小生が煽動をして何だかストライキみたような事を行った、それから法政大學でも單に氣に喰わんという我儘から内田百閒さん並びに多くの教授諸君にむかって突然爆弾動議みたいなものを叩きつけて當惑させ、例の法政騒勤の口火を切ったのも私です。それに反して、自分で随意に選ぶ出版業者とは大抵うまく行く。それはうまく行くはずで、何か重要な事を一緒にやろうという時には、私は決して威張っている有名な大きな所とは結託しないで、すっかり私のやることを信用して、私のやり方を御託宣のように考えてくれるところへ持ってゆく。大抵の出版業者は、少し本の數を出すと、かならずその背後に小うるさい小姑がついているものですから、そんな小姑のない所に仕事をやらせる、したがって必ず駆け出しの、名も何もない人と結託することになるわけです(日光書院などもそうだったわけです)。だから、『我がまま』と『傍若無人』というやつは、わたしに取っては、たとえば潜水夫にとっての潜水甲羅のようなもので、家庭においても世間においても、これによって同胞人類という水を肌から二寸乃至三寸ばかり隔離して保つのでないと私は何もできません。ここに世間的に言って私の強みもあると同時に致命的欠陥もあるのではないかと思います。これまで人の前で何べんケツをまくって啖呵を切ったか、一々おぼえてもいませんので、此の席で一寸恐縮の意を表しておく次第です。最近の野糞も、年が寄るとあまりケツをまくる機會もないので、不知不識の間にその埴めあわせという意味で道樂になったのかも知れません。話というものは、やはり落ちるところまで落ちないとケリがつかないものと見えますね。(終)